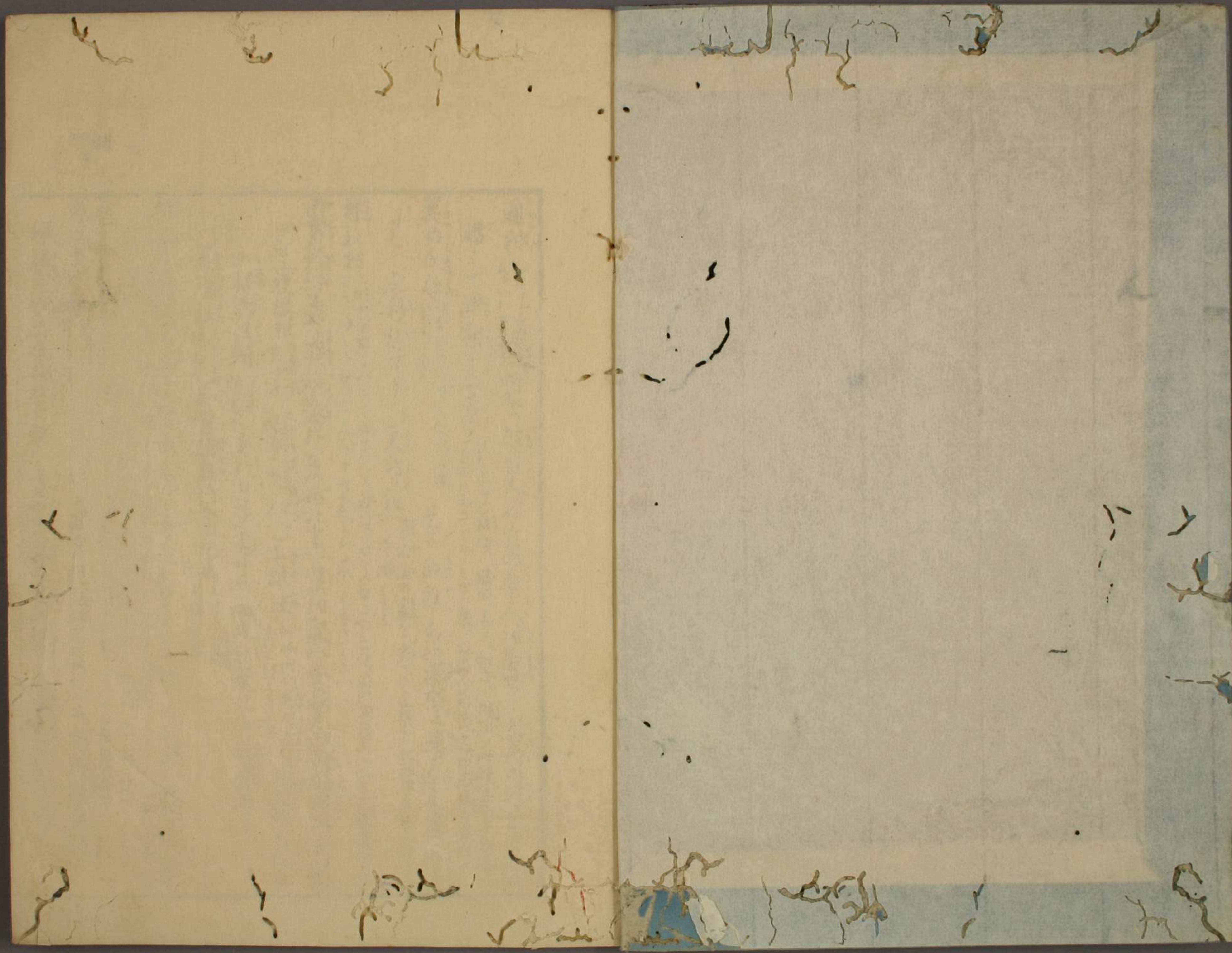


ル 4
3526
6





通村 此所の往昔大社宮の奥人住居せり かつ門の境より

將 任事三座の猿樂の勝回 申樂と云ふ

箕曲氏社 西南の方より二足一の大橋 是を流社と云ふ

天神社 菅原相の靈をまつてこれを祀りて天社といふ

三枚橋村 川橋より天社の邊にあり 小林社 川橋町の尾川

大津社 川あり 外宮攝社八石の内也 石洋と云ふ

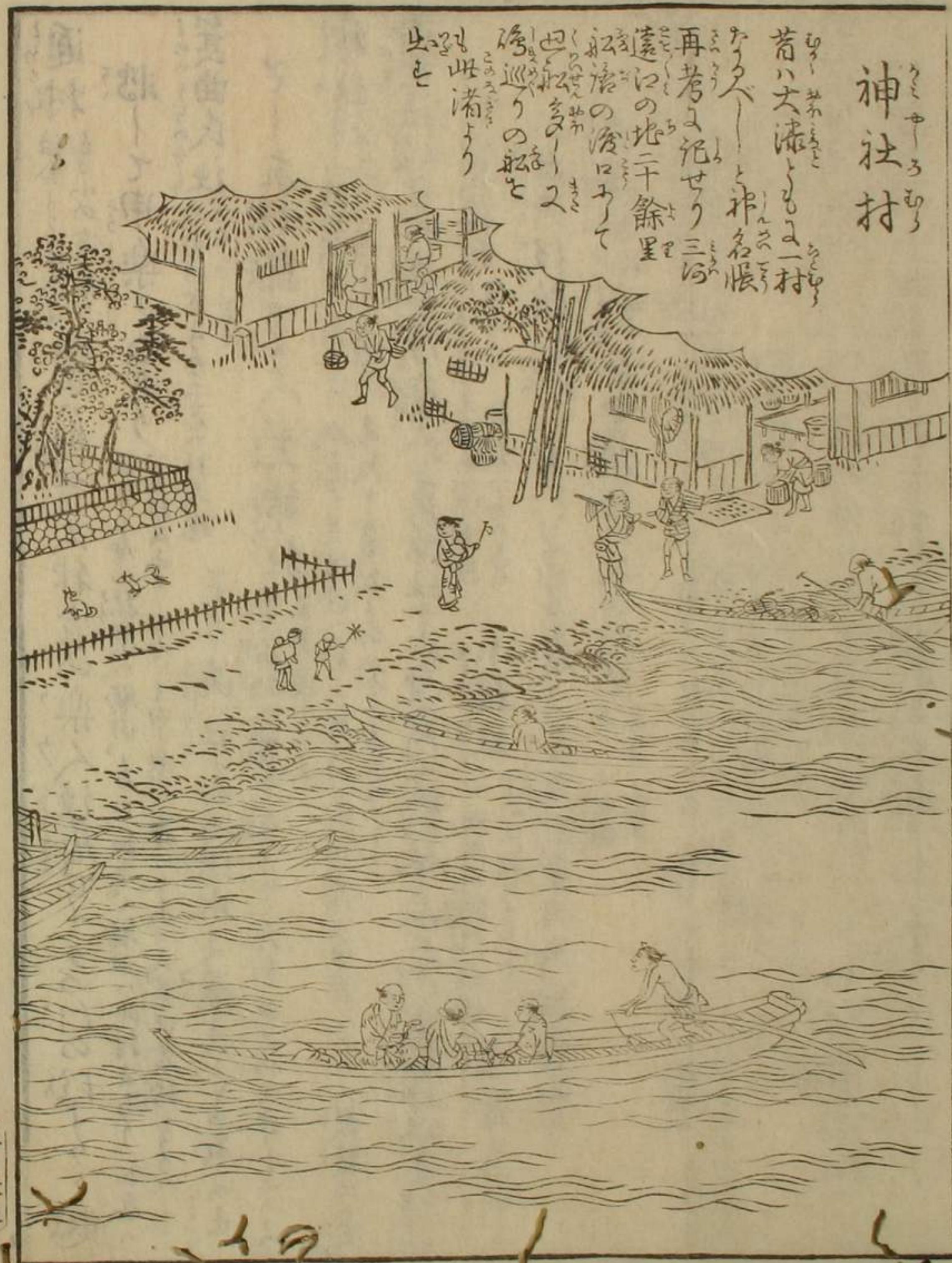
志賣屋社 大津の西の入り 倭式帳又外宮攝社八石の内と云ふ

神祇本源 又塩屋社と記と賣屋の家の誤り 志賣屋社

志賣屋社 大津の西の入り 倭式帳又外宮攝社八石の内と云ふ

神祇本源 又塩屋社と記と賣屋の家の誤り 志賣屋社

昭和十六年一月十一日寄
尾野貴英氏贈



八幡宮 大正の頃 川の比より祭事を去るに社家清原氏両宮の支配を授

とす糸を糸入て叙爵を任勢國中よりかた創とく

今一色村 二見郷をさぐり 此村の系より入海ありて南より北に流るる

高城濱 非社村の向ひ二見の郷の内 毎年九月十三日御濱出の神事より外宮

徐宜山 淡み後を修し後湖をあひく清まる 俗より長官 此辺より雨太

神宮の御垣をくろの溪あり渚みなる居あり

打紙濱 立石傍より 郡中の人父母の畏の服とぬ時定しく垣ありとる

此の溪の淵を汲て飲む浴湯ともあり

修勢濱 や浪の赤じり 月さる波風ありきき此溪萩

所名

所名

所名

二見浦 此辺をこま 七郷の熟名人七々とい 江村、三津、山田原、溝口、乞

を南三郷といふは乞内宮飲之庄村、西村、出口と小三々といふ

所名

立石傍 江村の傍の流の海中左右に立石あり 此石の傍と湯

醜して沐浴し汚と洗ふと母垢と云ふの云

三狐村 立石の傍 穴ありて是也

西村、出口と小三々といふ



大湊
津波の内字活
山田大湊の
と列する
人家
新井

五ノ四十一



二見浦



二見の浦は満ち潮の
 辺りの極名で此の石
 とは石運り三河の石
 と付てつう二見の名を
 流しあれも悉く伝
 とうんまの流の干
 ぬまつちくの貝と拾ひ
 産成る所の村の細引を
 してたまのまのまの基
 真あり
 我は石を運り真の
 の群不うて運神のこ
 岩は流干はもるん
 津ありは群回を
 けりては神

つうは石を運り
 二見の石洲の石と号
 りのうらまるとまの
 珊瑚はゆるる石あり
 又旭富士をるる
 ま清泥云がごとく
 日の地下と離んと鉄
 間合くるとてまの
 石の運り



世は二見文基とのひて
 必し船をかける石を
 岩尾崎といふわんく
 連なり麻を文基
 とくかき石の石と
 せしより舊の石も
 礎といはらやふと石を
 まがふ二見の石も

の終り今一多村を合せて山三つと云ふ外官領之六御とてこれと七つと云ふ
旧一徳とて中法の礼堂と武家の領地とめて其後寛永の法今一多村の長
惣訴とて終り元のおく神領といふ事なり其の人皆立石橋をのこ二見と云い
誤く二見と云ふ神領と云ふ事なり

拾遺集甲

まどかごころをばらぬをばらぬ神風流とて夜の月

定家

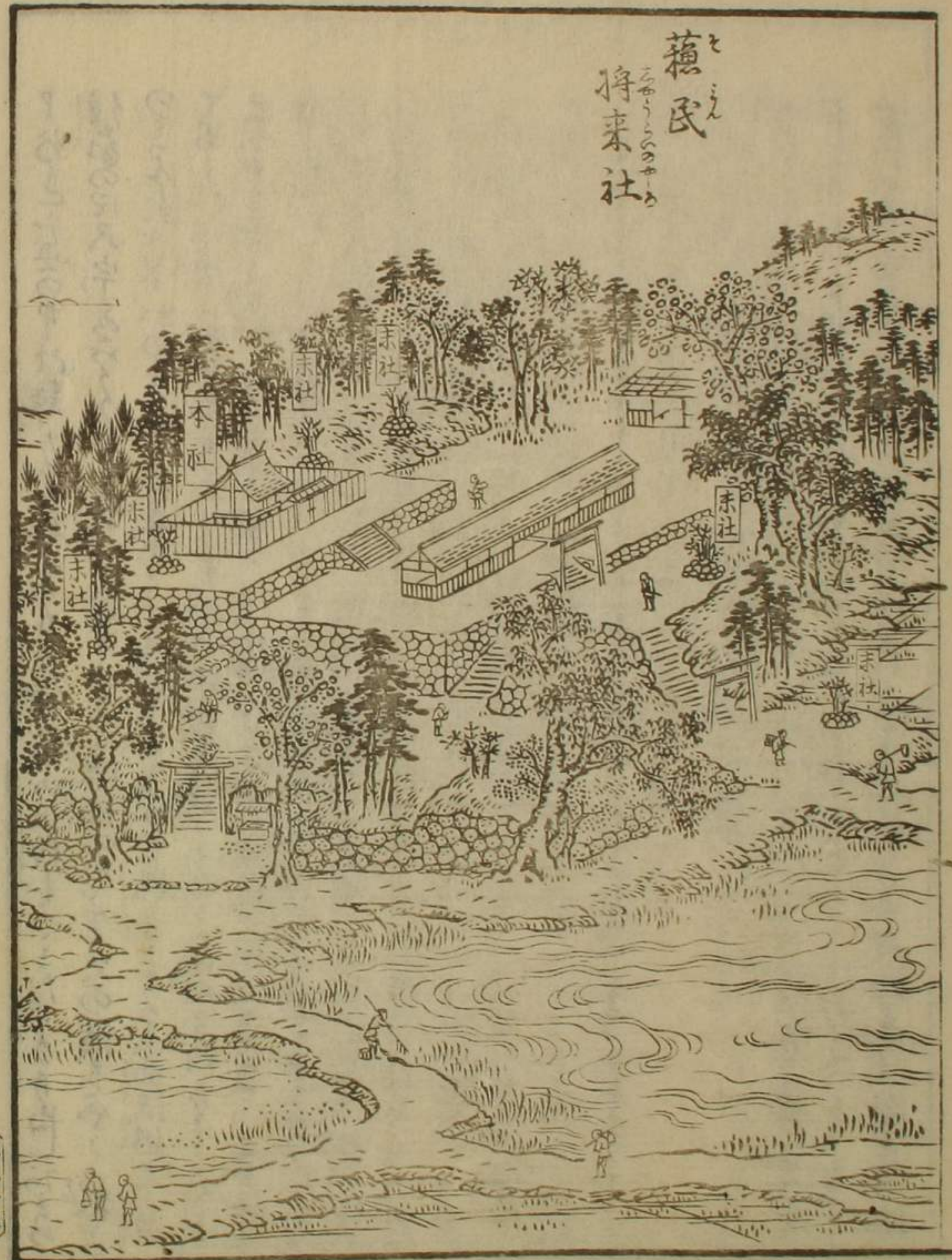
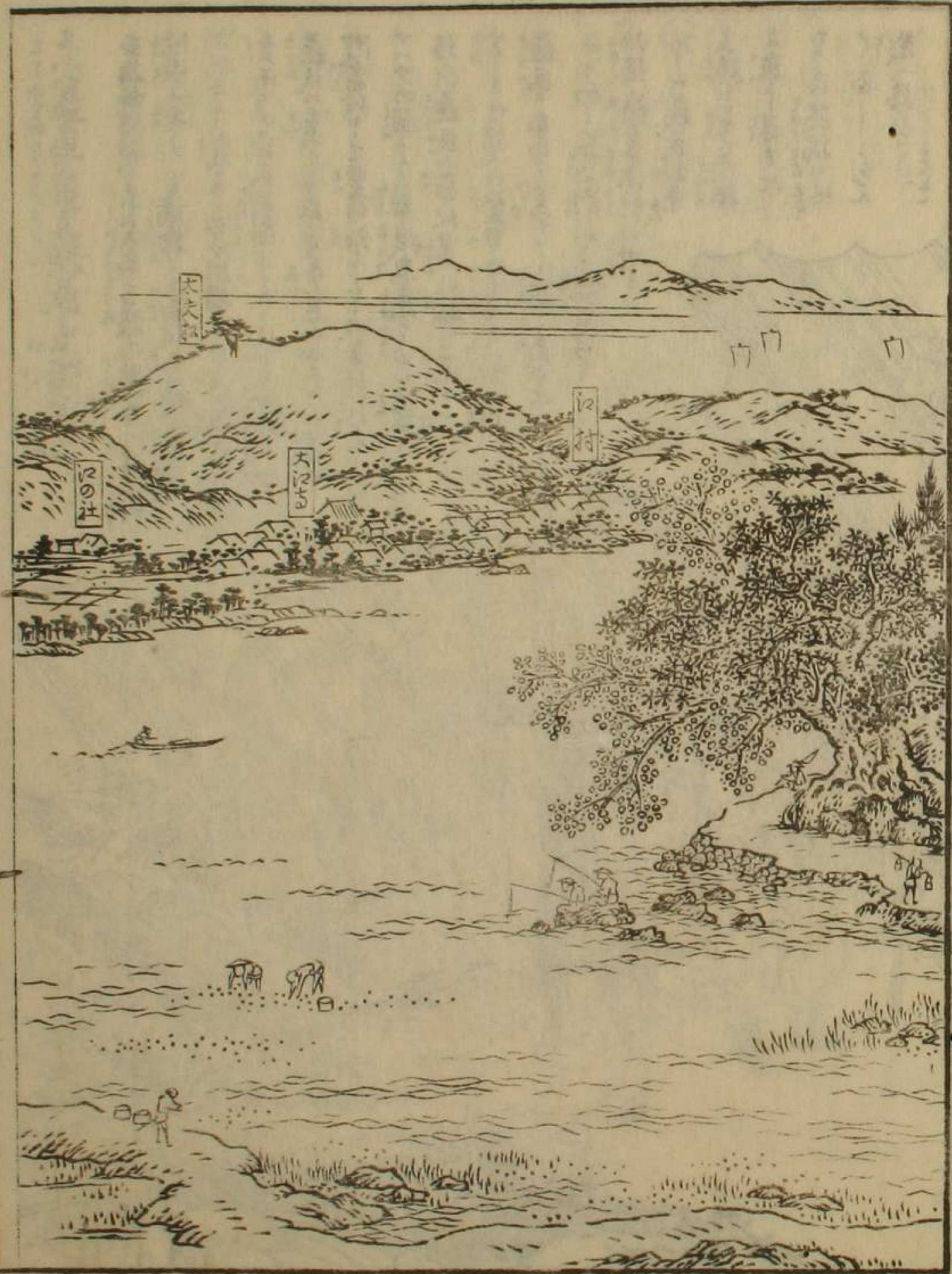
金葉

五つげふこのとれ本のもういふは明於其の夜の月

源親房

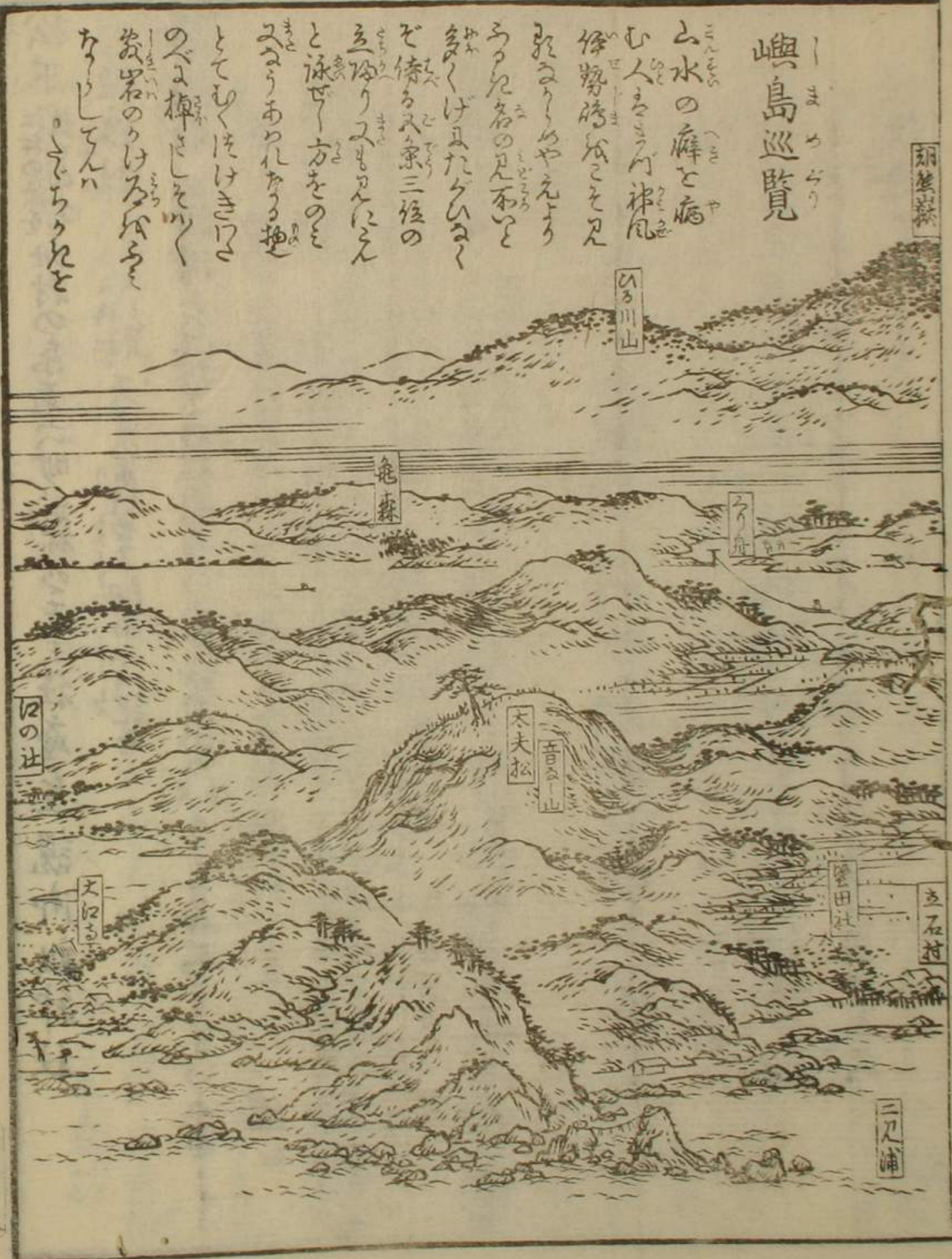
系清記云これ浦の系ををり都て徳人ばりともこの扱ふあり遠浦
助とて万株の雲烟と和ら琉島磯とて百尺の巖月よそいふと
と此浦は佐美明神とて古に神ありとや傳へり巖の荒れまじりて圃
とありと沖津浪あまのこまらるるれが松の落葉にま向のるの煙とて
津さびり俗に安をばらぬとて大波の浦もあつたにや俣橋のこも
もるるふるまやらぬ南のゆきををむれが白と妙雲があざかりて清さぬ
遠くゆきば入海のうきをわづらひと荒き浪辺の落葉をゆらりと山陰
のちの石橋も扱ふりて溪の灣音とてかろ黄葉も拂ふるるは松風
ま竹も携りて遠かるる松もあるとてとら僧坊なにもありたりとや

ヤつてこと世の中は静かぬうりて禪後の止位とてたより内じらまの
住家のに又宇あづりてを焼くげすも漁舟のかまの波をやくと
のこを松 中畧 かの寺より 舞臺のうらうらとみりて眺をとらふ曲流波を流
てあつた松繪よかろろぞおと一是やこの音よまよまよのまのわらうんと
と久も誰と問へともそそと中畧 霞よとての溪荻の風よとよやく香ゆと
押りぬるかろろの波向を流るるなり浦辺の真若若の系とて流るる
居まらぬ海門より松の枕をげり万里の波も遠さうり遠づきいと流るる
みりぬる涯とて雲の波烟の浪將くこれ多海のさうひ圃とていそをなやん
中より 修良 鹿島 鳴海 深もかこふやと押りひやりあまのたこ川も
この灘の春にささくゆきと波流かり安士のささるるまのこぬえに
て雲うけぬるとたれども伏籠との中うけぬ風もさうさうのこぬえに
りたりと里の名をもつとて一浦の地景とて此浦の奇物なりへのら
あつたつとてとひゆきと老ぬる身もたれのもてて
老の浪も入るるささるるぬ二見の浦の名もたれのもん
磯と云けのる風はさし新夜も何かま心とてた寺あり安堂とて中
右なりと云ふ西郷上人のともをゆりたりと回返とてうけたまひる 中畧
官川の奇合をも此所に集めたりとてうけたまはるる松風とて西官の河



嶼島巡覽

水の癖と病
 心人さき行津尾
 怪勢崎成こそ見
 ぬさうめやえよう
 ろつれ名の見不
 多くけまたぐいさ
 ど傍るみ糸三佐の
 立降り又も見たん
 と泳ぎ方をのこ
 又さうあられあつ
 とてむくほけき
 のは棹さしをわく
 炭石のけけるな
 かりしてん
 さちくれと



きてくをきをりし
 うこそ世の人心うあ
 たしと標高の葉も
 ちくた時葉の葉の根の
 得やをたをたつ
 ながた唐土の石ま
 とのあふいのるたよ
 まつ入る一筆
 うさごらんや





ての中へ海へ入りては中
 の船共舟楫の魚集り
 ありを舟を舟の夕
 松や舟を舟の浦
 西条の社
 魂通に命内宮松社二十
 日産の内なり



神島
 斗の荒海
 深瀬
 小湊
 有瀧
 宿浦
 津津
 右の

附録

祭記の奉

○祓衣糸 九月十日 延嘉式云 和妙衣廿四疋 八疋の度とを尺八寸八疋の度と一尺寸と

野若糸 頸玉 手玉 足玉の緒 袋襖の緒の糸各十六丈 纏糸六十四條

各長 長刀子一枚 短刀子 針 鉾 鐸 箸 玉串二枚 韓櫃

二合 一合の衣を盛る 答 一合 衣並籠 〇 荒妙衣八十疋 一疋の度とを尺八寸 一尺寸

針 各廿枚 韓櫃一合 頭玉の糸は洗つて頸よりけし 襖の糸は洗つて袋襖の糸は洗つて

かくの糸は洗つて延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云

麻襖氏各索糸 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云

腹邪織女八人を奉ひて延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云

洗つて宣る法て再拜 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云

延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云

月次祭 六月 内宮より 赤引糸 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云

延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云

延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云

延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云

延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云

延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云 延嘉式云

も編みたり後世(一)と云ふと云ふ傳り也
日本紀神代天孫海宮持統の章は口女といふ魚の編みたりと云ふガチの傳
語もやあつた尚考ふべし他不ふくも仔細經と云ふ

回祿の事

神都み失つる付其後人の勿論若くは火消人といふまで云ふは神を
ついで消たりは神明の聖王を定めたるの意なり

新名所教合の事

伏見帝の御宇永仁正安の法皇正安忠信荒本田姓の非人親門を繼ぐ親
津都の名を以て和方八十首所成り判者いふ大納言の世御國に去佐の某
かやかりと云ふや和滑橋本の里泉みの妻岩浪の里三津の濱お紙の濱
の里若波の里大沼の橋園中の里園は凡て十ヶ處之内園中三津は辺お紙の
にや不い現めされ余いれれとて説あとも定りたりは中にも園は祿教とも
教あして傳りて新名所教合と
三ノツケ

三角柏

毎七月に日雨宮凡宮は柏流一の神のみ其秋の吉凶と云ふは此堂成り久
流りたり其外非事より柏の葉の葉は及土貞徳の傳りたり
何たり内宮神田祭の祝とも食物と此葉に包り他園にも民家田垣の日の
祝の食物は用たりと云たり又浦親集といふもは神田堂橋川の岸みせに

人を足つての柏と云れ又柏の葉は三津の柏と云ふは此堂成り久
流りたりと云ふは此堂成り久流一の神のみ其秋の吉凶と云ふは此堂成り久
明神勢の流りたり此古書より云く柏の葉は及土貞徳の傳りたり
又或は古の書より此葉に包り食物と此葉に包り他園にも民家田垣の日の
祝の食物は用たりと云たり又浦親集といふもは神田堂橋川の岸みせに
やと云ふは此堂成り久流一の神のみ其秋の吉凶と云ふは此堂成り久
葉かりたりと云ふは此堂成り久流一の神のみ其秋の吉凶と云ふは此堂成り久
例たりと云ふは此堂成り久流一の神のみ其秋の吉凶と云ふは此堂成り久
てのみ流りたりと云ふは此堂成り久流一の神のみ其秋の吉凶と云ふは此堂成り久
或は古の書より此葉に包り食物と此葉に包り他園にも民家田垣の日の
祝の食物は用たりと云たり又浦親集といふもは神田堂橋川の岸みせに
やと云ふは此堂成り久流一の神のみ其秋の吉凶と云ふは此堂成り久

わがこられ事

毎二月に西宮官地の外に此堂ありと云ふは神の神社の造り成り二月に
其は天皇寺の樂に似て流りもは此堂成り久流一の神のみ其秋の吉凶と云ふは此堂成り久
儀樂をいふは神の樂に似て流りもは此堂成り久流一の神のみ其秋の吉凶と云ふは此堂成り久
流りたりと云ふは此堂成り久流一の神のみ其秋の吉凶と云ふは此堂成り久
る教樂は皆此堂の教なりと云ふは此堂成り久流一の神のみ其秋の吉凶と云ふは此堂成り久
混りて公庭彦家の説なりと云ふは此堂成り久流一の神のみ其秋の吉凶と云ふは此堂成り久

神祇に類するものなり

修勢三座勝田をま和座權進ま其首宮川外又修居地名を
とせり今い山田外溪の柳より勝田をま和座權進ま其首宮川外又修居地名を
とせり今い山田外溪の柳より勝田をま和座權進ま其首宮川外又修居地名を
とせり今い山田外溪の柳より勝田をま和座權進ま其首宮川外又修居地名を

御所神の事

毎二月十八日若後三日山田市柳をま和座權進ま其首宮川外又修居地名を
とせり今い山田外溪の柳より勝田をま和座權進ま其首宮川外又修居地名を
とせり今い山田外溪の柳より勝田をま和座權進ま其首宮川外又修居地名を
とせり今い山田外溪の柳より勝田をま和座權進ま其首宮川外又修居地名を

退遣

山田市中夜流流好付處形入形大と二六三六も作り押辺は持出焼拂ひ或は流
せり其後とて貝種をさらし夜鬼を送るの意はせり山田の山より始りや
秘居通は菊靈堂と申して人形を造り芝居を真と申す神宮山月夜は是と
月い初夜にも又作りと申すなり又形代のゆり香く世に去りり是等のゆり香
は是等のゆり香く世に去りり是等のゆり香く世に去りり是等のゆり香

石戦

此の甲陽軍鑑あり私世のは小見の戯れとをいふを遣り傳へしとてなり
系部はま小四のころは酒肆まで郊の後らより尾川系と申して隊伍を
分ちて排り切本めて心をかゝりし者多しなり在る令やうし止ぬ正徳の保の
はまは神部にも此事これなり小見の合と申し一二月の夜と申し
ま御清式は元也今其のゆり香く世に去りり是等のゆり香く世に去りり
是等のゆり香く世に去りり是等のゆり香く世に去りり是等のゆり香

中より其の怪りたり勅も其の命七天下の法令と被り其日教を感し免る
よのり及又非却肉食の福穢其嚴密たりと法肉食辨と云りの如く且香川氏
が棄選も其意分違なり正非神を辨肉食辨を著し終り其六宮の三の罪
をして七の是を掩むと云り心を用いし人へ我同猪鹿と食としが
肉也とて其忌程を數り不忌と云たりや言て曰熟肉の形もて見若し其
冷り魚の極く菜蔬はまじく煙一程をみかき冷菜品としれば大駭穢と云
はと世にまじ非許違宮の附官川の上で麻の肉流止りしを穢地見終りて穢ら
しとて其不潔違終りたり今も人の見て穢と物と食し非を辨を辨し終り
危り不可なるまの事れば穢の並詰の食せざる人へ一正の祭肉
の是非殿せりるまの教日戒して魚菜其のものを忌神穢の後々の參
宮にも希三テ日の物忌致育教育の古法あり是皆敬神の要きみなる古法
うて已まるとはれが棄選も熟肉を免とも古法あり忌服穢の論い己を
穢しむの事と云り言をて述ぐ古の終りき福穢を毎年おぼへる初に
中より又保元承元記を執ると
西川氏水去考曰日本の人性好法蕭索白物惡法濁穢毒之數要若れ
凶祀と案に終り本物外士の黜絶をんる一或は去其棄選より其皆た
を混し使石使の時世をまじまに律も太古史食を不知して長壽たるべ肉
菜蔬も生はく食し本物の後世靈國より後其棄選も物之八十

老の綿と云り余の麻布と見いし是より今も今の世人古凡る
穢人の事

非穢み妙いを刑史葬の穢忌因獄も穢人終りて人をも穢同死刑の事
と如く守入牢の者より別史の食と調親族より送りたり又死刑は穢は
不より穢持あり満國まされる同の浦田坂牛舎のりの乞みたりを南は食
との大名家許參宮み多國を終り富有の多官人も穢して終りの例あり
を法するの絹布をそし其形穢人も終りて終りて穢しと穢勢を
食としは終り又比丘尼と云りのみそも乞馬なり穢人も此と希みる
穢して農商家の妻ももこなり
相殿別宮布式内式外社官の解
御殿の内より祀りて相殿と稱しなれはを祀る神に決り別宮決り穢社未社
あり穢社の社名帳は日本國中三千二百三十二座穢勢國は二百又十三座と云
を式内の社地と稱し其餘は式外の社地と稱しとされ非徳の叙此も限るべし
ど名湯水八幡宮徳園如との社社式外ありて式内の其跡は先づいれ非
靈と人の人の附は過不遇ありとされ穢社の事く末社の事く穢勢
を中とすもありて或は内宮の別宮決り穢社二十日社外宮別宮決り穢社
十六社と記され其謂るよりあり外宮に十末社内宮八十末社の事

國史旧記より今と西宮のみ今の拜殿百二十社に保多中津寺多石川大瀧寺
東武へ訴へ給ひ造営ありしより後補官宮の例とあり西宮より多程遠
く於此社の拜殿なくとも社号社名のまじりたる間ありたり造拜殿の
拜殿を設けし石槨の古法あり内宮別宮の遙拜あり皆石槨あり外宮月
讀宮小津門社下津女の石槨ありと云拜殿の皆中右より遠く来りたりは
てつひごとく外宮の宮地も小き石槨なくありて俗に田津と稱し中
も大子良然の南に石槨と号し雨抄ありを構へし本あり是より良後進む
童女を此石に置く櫻を籠と例あり掃拂いありあり諸人紙にて衣
敷の形を敷く彼石槨は紙に敷け紙に敷くありあり此外の石槨も間々
有俗其根を考へて

必俗若むら石槨はと云老樹を信じて結あり現あり人々の社
より大穴除けたり離宮の旧跡は族の交雜を祈るありあり茂如と云り
康素寺の佛の果の怪しむべし或日凡の社神靈ありと社号を改め官宮
痛恨治と云り怪しむべし或日凡の社神靈ありと社号を改め官宮
下し給ふあり官宮の社号ありと云り既し別宮と稱し社の叙ありと云り
二十二社の教と修勢を考へし一宮社祀祀り古記に宮社の分明あり
たりも多しと云り常彰社主の白宮の所屋之社に屋代ありと云り
云いたりも多しと云り又宮の宮殿ありて皇居至るの若石社の神明の所舎

あり今有栖川の宮伏見の宮と稱する数ありと社に神明と限る古来
宮社の混ざりたりと云り此の宮号ありと云り神の社に祀りたりと云り
或説社をコソとも訓するあり今不解彼再考し辨たり神の訓とて
靈の尊き物又宗と云りと云りと云りと云りカミとはつと云り
夜燈の事

西宮の神を灯明なり一夜の神祭に燈基十二基を設けてありと云り
謂と云り内宮にも神を燈基附せしと云りと云りと云り
みくそ古風あり
一説云外宮の宮地は常夜燈なり又百基半皆寸又度を考へて神の敷
用のと云り檜と云り造り給ひ給ひるの古法あり内宮の敷度神宮
あり常夜燈の敷を造りしと云り或は或は或は或は或は或は或は或は或は
さるに古法ありと云り夜中の系官人樹蔭にまよふありと云り中右
橋某西宮日多と云り法市中の助力を考へ外宮宮地六ヶ所常燈
六基を造りと始りて地國よりも寄附せし其六基は寛文の法より修補
して今もあり

園崎宮の事
此地元は岩淵町の田家中西某が領ありしと云り常明寺に遷りしあり寺の形
又建より其著りたる社殿ありしやと云り此の社殿の東邊に社殿三ツあり

宇治橋姫の社 夢光院の辨 天此妙見寺之西 祇園方の曾て 社政印の事

大宮司家と西祇園家に傳ふる御政印の類を云く 皇孫の靈今云金印
あり大宮司家の不慮に脅衡二年内宮に天平八年外宮に貞觀八年
少く傳せ給ひし一之西祇園より奉同の款收大宮司家及び長官家より此
御政印と押て載せらるるの例あり外宮に御政印の御倉と云ふを
奉りし其後の外宮の拜するや多く是より用ひし外宮の官地
振出し赤土と天恩徳并み和し一箇人の例と云内宮にもこれら
委し一くば傳ふと

長鯨の事

毎六月初日を忍國勝村より西宮へ是と載せらるるの例あり
之り今案察して傳ふるや一延嘉元御厨鯨と云り毎正月
料は長三尺余巾一寸余其餘教ふり若お類と云り

佛法の事

我同日修勢の祇園に僧尼の拜不あり我宮の忌河を引僧を
長いとい佛といむる他は神社と異なり此編寺院を神社と並
五七六

なせに佛圖の衆多かりし神意みりる人王と云つらん若てい
佛をいふに警敵のさく其れも物多し佛も寺院の事をも
ものさし其れ真意も天方り凡下の不ふも其れをいふ我れ
佛のさしんたれことと佛法のさきも其れ大系至多の速い
聖後宇多帝に西宮に法樂舎を建大般若編せり又攝町帝に
裏(を)敷きましますの觀念よりて滝く絶る公卿勅使宇佐香
二十二社の奉幣を興し終り大嘗會の末後教日の同浴中の佛
まも其れを禁せり凡れ佛の出入医師に佛意をいふ法名
らん佛を避給ふるや佛圖の法は序なり其の勅使藤原系
されは後宇多帝に凡れ世の世に治世の法をのつる著明
流例既に改めし世や凡れ世の法をのつる著明し
改め給ひし神意も佛圖の衆多かりし聖武帝の觀念も興り
終りよまらる世の世俗なり神意も大般若編を其の觀念も
佛(が)死を悟り給ふも其れをいふ其の觀念も興り其の觀念も
と却て其れを佛と神意心と其れをいふ其の觀念も興り
易の至尊今日も存在す即天孫の神祇なり後水尾帝の御製
たつるや此の國も我國の神よりけり天津日嗣の志あり
每百余世の帝王賢のさしんて愚かるも其れをいふ其れをいふ

我が朝の深武帝ありと御り若湯帝の道徳ありありは山帝の婦人の死別
忽ち法神ありしが間もたうへ悔ゆるの教保元平治の乱より始て王道衰へると粟
山氏の源を流して保元大元を書しとて論論かれ我が朝の佛家の麻呂の建
立して聖武帝の再興かれ源流して流しとて佛家の小云佛乃の王乃之や
実のちり空海寂澄を大師の基を菩薩とて弘法傳教の入唐の
勞其徳もたふし今公威も依り後号の大師と仰るの類は漸く百年を経て
徳のたつたれとつめや弘基の佛師より寺を建物を架るの工人と菩薩を
して傳教弘法よりつめとては是等とて佛道の王道を離れて三ヶ
つた謂かりえより我が朝古今流布され佛法よりありの教を傳来の佛法とい別
種星白のりの今や諸國の寺僧も格別の教法を奉ひ高寺の行の宮院下竹の所
廟不寺外に幾許と傳りて公を弘基の標級みつめり地あり隠せし衆人も又古佛の
さうさへいど金色の莊嚴に入料のむとを日々修むとて弘法は編繡とま
とい酒肉を肥をそくくそくをそく僧と作げを釈る西漢今世より
密といれりトキ一後つんれと實の佛法と仰るを食肉の境界の皆佛の
非佛の混雜とされ其大原より獻意みせられん下の者は是を厭ひ防んとす
とも及ぶとれ

入宋して禪宗弘法の人を弘む當時の人思實の佛法と仰依偈作をさせり
抑も源空其一教とて工夫一其の神と仰りて其子の親愛其其教とも
てそもこれれ變化をなると安んじ蓮花とて又一教と仰るとれとて西より
東へる其書書義書をとりて其理をんといへんといふ西より東へる
顧る者ありて人の情面のごとく異なり其背りりのを捨けし捕むと綱を張り
蓮がやんれかり弘法傳教の業のむみ外に源空の業あり源空親愛の君とて
後世の人情を慕ひこれと仰る文接とらるる風潭が華嚴と真んといへり
智の道とてこれと仰世の人情を慕ひこれと仰三僧み及りて古く奉給の
佛法といふりの君王死別の憂を耐え終り舞曲の教をこれと仰りといふ
ありといふ蓋なり

謝みたりとて名をよめて書き出さるる尚ほ
おもしろ名をほれよとて書き出さるるものは
持小のいくまといはしこらるる名もい
ちのよは伊世の海の名もいふ名もい
けうらぬそ折字のよはしこらるる
濱おきりりしとて名をよめて書き出さるる
かんとわりの名もいふ名もいふ名もい
なまじりくともいふ名もいふ名もい
けち免脱とて書き出さるる尚ほ
くちしとははゆつね又いふ名もいふ名もい
よはしこらるる名もいふ名もいふ名もい
いふ名もいふ名もいふ名もいふ名もい

事を知りしとて名をよめて書き出さるる
そいろしとて名をよめて書き出さるる
すちのよはしこらるる名もいふ名もい
ようしとて名をよめて書き出さるる
はあしとて名をよめて書き出さるる
おろしとて名をよめて書き出さるる
おのれ又そのよはしこらるる名もい
きとて名をよめて書き出さるる
あしとて名をよめて書き出さるる
もすしとて名をよめて書き出さるる
こものよはしこらるる名もいふ名もい
これとて名をよめて書き出さるる

しるすつゝも昔のりも紙のり
こゝちを記すもあやひきよむへん

寛政九年己未の
閏七月

たのみの海驢織

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

寛政九年丁巳五月

京都書林

菱屋孫兵衛

吉文字屋市左衛門

柏原屋與左衛門

柏原屋嘉兵衛

塩屋 平助

勝尾屋六兵衛

塩屋 忠兵衛

大坂書林

寶曆元年十一月廿五日

京都書林

大正書林

歐風 次共衛
朝風 盛六共衛
歐風 平相
朝風 盛六共衛
朝風 盛六共衛
朝風 盛六共衛

